

「コロナビを用いた新大腸内視鏡テクニック」

多田 正大 著

東邦大学大橋病院消化器診断部

酒 井 義 浩

何をおいても、まずは著者多田正大氏の旺盛な執筆活動に敬意を表すべきであろう。狭いわが家の書棚にも、氏の著書や編書が5冊ある。職場にはこれと異なる氏の書がほぼ同数あるから、おそらく膨大な著書が上梓されているに違いない。

本書は最新の1冊(そう願っているが)で、スコープ内に組み込まれた複数の磁性体から発信される電磁波を、近傍に設置したアンテナで磁界を計測し、個々の磁性体の位置と相互関係をTVモニター上にスコープの形状に加工して表示する装置(スコープ形状観測装置、著者はこれを「コロナビ」と呼称)をいち早く臨床に用いて、その使用経験から有用性を具体的に紹介している。

そのために、冒頭で大腸内視鏡の挿入法の変遷や本装置の概略を簡単に説明し、本書の核心とも言える挿入技法を本装置のモニター上で示される像を用いて解説を加える構成になっている。本書の「新」は新しい大腸内視鏡テクニックの紹介ではなく、むしろ形状を常時表示できるようになったことで、「新」しい視点を提供したと考えてよいであろう。スコープの改良と被検者数の増加とか

ら、いつのまにかX線透視の行えない内視鏡室での大腸内視鏡が常態となっているが、それでも途方に暮れることもある。本装置を併設すれば、X線は不要となり、X線透視と同じ像だけでなく、被検者の体位にかかわらず正面と側面、希望するならどのような角度でも、2方向表示が可能であり、しかもスコープの形態だけでなく、X線像では単一平面でしか表せなかったスコープに濃淡を付けて三次元表示されているために、容易に立体認識できることが示されている。困ったときにチャットと見ればよいことになり、経験者にとっても心強い装置と言えよう。

これらの豊富な像に加えて、おそらく著者の手になるイラストが適宜挿入され、文字数を少なくして理解を深める工夫がされている。さらに要所要所に「note」と「ワンポイント・アドバイス」が配置され、前者はエピソードが主体で、後者はチョットまじめな本音が述べられ息抜きも与えながら、単調になりがちな技術解説を一気に読ませる工夫がされている。さらに挿入困難を解決するために、「ケース」として10例が各部位の通過法の最後に加えられて、

特殊な事例への助言が示されており、著者の並々ならぬ気配りが読みとれる。

「コロナビ」を語るあまり無理を感じる箇所もないわけではないが、総じて体内でスコープの形状が挿入の難易に関連していることを示す好著であり、本文86頁と手頃なことから、ぜひ読んでほしい一冊である。

ただ印刷の具合か背景が青すぎるのはおくとして、「コロナビ」が用語として適切であるのか気になる。著者の本意は本装置が安全で、円滑な、苦痛の少ない方法への提案をなじみやすくする便法とは思われるが、進むべき内腔が示されているのではなく、あくまでも被検者の体内でのスコープの走行を示しているだけであり、経験の多い術者にはそれから先が予見できても、どちらかを指し示すわけではないので、著者の愛用している呼称であっても、その語の醸し出す期待が一人歩きしないようもっと警告が必要であろう。

● B5 頁104 図12 写真15
カラー写真37 表10 2000
定価(本体4,000円+税) 送料実費

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)